

氏名	田村にしき
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博音第199号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉謡の伝承に関する音楽教育学的研究－宮城県北部の調査に基づいて－

論文等審査委員

(総合主査)	東京芸術大学	教授	(音楽学部)	佐野靖
(副査)	〃	准教授	(〃)	山下薫子
(〃)	〃	教授	(〃)	塚原康子
(〃)	〃	〃	(〃)	杉本和寛

(論文内容の要旨)

本研究は、宮城県北部における謡の伝承プロセスについて、音楽教育学の視点から、教育的・社会的機能を明らかにするものである。

研究対象とした宮城県北部は、江戸期に藩主が能に力を入れていたため、謡の伝承が盛んな地域である。筆者が研究対象とした地域は、①「登米謡曲保存会」がある登米地方、②「新田ノ目春藤流保存会鉢の木会」がある田尻地方、③「大蔵流謡曲保存会」がある岩出山地方の3地域である。

宮城県北部の3地域を比較検討する重要性は、隣接している地域であるのに、①登米地方のように、登米能を伝承し、能一番を舞台上で上演する能力を持ち、謡に関しては、中央の能楽師の関与がある地域、②田尻地方のように「道場」という独自の学習方法を現在でも続けている地域、③岩出山地方のように、次の世代に向けての謡の継承の取り組みや仙台藩独自の謡曲を復曲する創造的な試みを行っている地域であること等、それぞれに独自の特色を持つ点にある。

謡の伝承、それも宮城県北部というごく限られた地域における伝承プロセスの中に、今日の音楽科教育が置かれている状況や方向性をとらえ直し、直面する諸課題を克服するための重要な視点が内包されているのではないかと。このような仮説が、本論文の出発点にある。

そうした仮説に基づく具体的な問題提起と課題意識は、次の4点に集約される。

- ① 謡の伝承には、音楽科教育にも通底する教育的な意義や価値があるのではないかと。
- ② 基礎・基本の習得と楽曲中心主義は、本来は相互に高め合うものではないかと。
- ③ 「個性」や「自己表現」の重視と、「模倣」の徹底は支え合うものではないかと。
- ④ 専門家ではなく、地域における愛好者達の伝承だからこそ、独自の方法や形態、さらには文化創造に向けた学び合いを見出せるのではないかと。

第1章では、史料研究によって近代以前に民間で行われた謡の伝承を歴史的に概観した。室町後期から江戸期までを概観し、様々な階層の人々が、謡を多様な目的でうたっていたことを指摘した。特に江戸期には、寺子屋の児童を対象にした謡本も多く刊行され、寺子達が、多様な目的で謡を学んだ。さらに、江戸期の仙台藩周辺の地域では、「道場」の学習方法のように、子ども達が異年齢別集団で謡を学ぶ形があったことを指摘した。

第2章は、文献調査と各地域の保存会会員へのインタビュー調査に基づいて、各地域の歴史をたどりながら解明を試みた。特に、各地域で使用されている謡本には教材としての重要な特徴があることを指摘し、その謡本及び謡が実際に生活や儀式の中でどのように取り上げられていたかを考察した。さらに、

謡が学ばれた「道場」の教授内容や方法の特徴を取り上げ、謡が一人前の成人になるための必須の教養であったことを指摘した。

本論の核となる第3章では、伝承の歴史と未来をつなげるために、「今」を生きる人々にとっての謡のもつ意味を明らかにするため、保存会会員にアンケート調査と聞き取り調査を行った。謡の学びを地域における音楽教育の営みとしてとらえ直し、その分析から、「文化的な営みへの参加」、「教授法における伝統と変化するもの」、「個別的な追求」、「協同的な追求」、「謡の持つ豊かな教材性」、「地域文化の継承と生成」という6つの視点を提示した。

終章では、結論として、次のことを提示した。

段階的に基礎を習得する謡本の構成と、稽古において身体全体で師匠を模倣し、楽曲を味わうことの相乗効果で、曲を学んでいくうちに基礎が身に付き、さらには、音楽の流れの中で要素を創造的に応用していくことができるようになる。ここに、基礎・基本の習得と楽曲中心主義が相互に高め合う学習のしくみを見出すことができる。

稽古の過程を丁寧に追っていくと、保存会の会員達は、個のレベルでは、徹底的に模倣を繰り返すことで、自分のうたい方を見つめ直し、「新しい自分」を見出し、自己の変容を繰り返していた。この自己変容によって、「型」や旧来の自己の身体を超えたところを意識して、初めて個性が生まれる。それゆえ、模倣の徹底と、個性や自己表現は相互に支え合うものであるということが言える。集団のレベルでは、仲間同士で切磋琢磨し、自己と他者との対話を繰り返すことで、互いの謡を高め合う。さらに、みんなでうたい合わせることで、仲間意識を高め、達成感や高揚感を味わうことができる。ここに、個と集団のかかわりによって生み出される学習効果を見出すことができる。

このように、学習者が自己を見つめ直して成長し続けていく過程と、集団での高め合いによって、謡の学習は、幅広く知識教養を身に付け、全人格を磨くことにつながる。さらに、次の世代へ創造的に文化を発信することで、人、地域、謡（音楽）のかかわり合いの輪が広がり、新たなコミュニティを生成することができるのである。

(総合審査結果の要旨)

宮城県北部における謡の伝承プロセスについて、音楽教育学の視点から、教育的・社会的機能を明らかにしようとした本研究は、隣接している地域にもかかわらず、独自な取り組みを行っている登米、田尻、岩出山の3地域に研究対象を限定している。それらの地域で謡の活動を続けている人々と緊密なネットワークを構築し、ていねいな調査研究を通して活動の持つ本質的な意味や機能等に迫った点に、一定の学術的価値が認められる。

また、本論文は、史料研究によって近代以前の民間における謡の伝承を概観した第1章、文献調査とインタビュー調査に基づき、各地域の謡本や教授方法の特色を明らかにした第2章、アンケート及び聞き取り調査によって、謡の伝承の持つ音楽教育的な視点を提示した第3章、そして、調査研究の成果と音楽科教育の実践を結びつけた終章という構成で、歴史的な研究と実証的な調査を結んだアプローチを展開している。これも評価できる点である。

さらに、地域における謡の伝承プロセスの中に、今日の音楽科教育の問題状況や実践課題を克服するための視点が内包されているのではないかという仮説に基づき、謡の伝承における音楽教育学的な視点や音楽科教育に対する示唆が導き出されているが、そうした独自の着眼点や導き出された論点には、音楽教育学研究として一定の意義を見出すことができる。

ただし、いくつかの課題も明らかとなった。結論的に示された各論点そのものは興味深いものであるが、その前提となる音楽科教育の状況や課題の把握が十分とは言えず、そのため結論がやや説得力に欠ける感は否めない。史料の扱い方や調査手法に関しても一層の厳密な吟味が求められるし、文章表現を

さらに磨く必要もある。また、「人格形成」などの用語の再検討も求められよう。

以上、本論文の持つ意義や価値、あるいは課題等を総合的に判断して、課程博士の学位論文に値する
内容と評価し、「(削除)」で合格とする。